

同伴者イエス

（ルカによる福音書24：13～27、詩編119：129～136）

今朝は、ルカによる福音書24章13節から35節まで続く、新共同訳聖書では、「エマオで現れる」と言う小見出しがついた個所の、前半の部分、13節から27節までが説教のテキストになります。復活なされた主イエスが、その日の午後、エルサレムからエマオに向かう二人の弟子たちに現れ、終始彼らに同伴され、道々彼らが話題にし、互いに熱心に話し合っていた、彼御自身のことを、旧約聖書を紐解いて、縷々説明された、と言う、多少聖書に馴染んだ者ならば、誰もが直に思い出す、大変に有名な箇所です。そこで、本日の説教題を「同伴者イエス」としたのですが、同伴者と言えば、旧約聖書に於いても、主なる神ヤハウェは、選びの民であるイスラエルが奴隷の地エジプトから脱出し、約束の地カナンに入るまで、荒野の40年を通して、終始同伴されました。聖書はそれを具体的に言い表し、昼は雲の柱、夜は火の柱となって、常に歩みを共にされた、と、そう表現しました（出エジプト記40：34～38参照）。そこで或る人は、そんな神を、「時速四キロの神」と呼びました。時速4キロとは、人間が歩く速さです。と言うことは、主なる神ヤハウェは、荒野の40年を通し、終始人間、つまり、イスラエルの民と歩みを共にされた、と言うことです。御自分の歩行に人間を合わさせるのではなく、人間の歩行に御自分の方が合わされたのです。あの時の主なる神ヤハウェと同様、エルサレムからエマオまでの道行きに於いても、復活のイエスは、二人の弟子らの歩行に合わせて、歩みを共にし、エマオまでの道すがら、彼らが気付かぬ間に、自然に対話の仲間に加わり、彼らが戸惑っている話題の中心、御自身の身に起こった十字架のこと、復活のことにつき、主イエス御自身、直々に、聖書を通して御説明くださると言う、彼らにとっては、この上もない幸いな時を過ごすことが許されたのです。

ところで、エルサレムからエマオまでの距離ですが、新共同聖書では原語そのままに、60スタディオン離れている、と説明されています。スタディオンと言われても、私たちに全く馴染みのない距離を測る単位ですから、如何ほどの距離なのか、まるで見当がつかないのですが、聖書の終わりに付録としてついている「度量衡および通貨」の換算表を見ますと、1スタディオンは、約185メートルだと出ています。その60倍と言うことですから11、100メートルと言うことになります。11キロちょっと、と言う距離です。日本風に言うと、凡そ3里と言うことになります。昔、私が通った田舎の中学校は、往復の距離を合算すると、凡そこれくらいの距離になりました。街中（まちなか）では、何にぶつかるか分からないので、道中、話し合っただけと言うことは、危なくて、とてもできませんが、人に会うことも少なく、車など全く通らない山道なら、これくらいの距離があれば、結構中身の濃い話ができました。私は、この場面をあれこれ思い描きながら、遂、友人と夢中になって議論を戦わしながら田舎道を歩いた、遠い中学時代のことを思い出しました。

ここに出て来る二人の弟子とは、十二弟子ではありません。ルカによる福音書10章1節以下に出て来る、主イエスが伝道に派遣された72人の中に入っていた者たちだったのかも知れません。その内の一人はクレオパだったと、その名が明記されているのですが、今一人の名は、どこにも語られていません。クレオパに関してはヨハネによる福音書19章25節に、主イエスの十字架の下に最後まで留まった婦人たちの内に、クロパの妻マリ

アがいたと記されているのですが、このクロパがクレオパのことではないのか、と想像されるのです。が、はっきりしたことは分かりません。もし、そうだとすれば、可成り名のある人物だった、と言うことが推測されます。では、今一人は、わざわざ言う程もない、名もない人だったのでしょくか。ルカが、こんな場面で、人間の格付けをすることは、とても考えられません。では、どうして今一人の人物の名を伏せたのでしょくか。或る人は、これは実はルカ自身だったのでしょくか、と言うのですが、この推測には大いに無理があります。大体時代が隔たっていますし、ルカは、ユダヤ人ではなく、異邦人だったのでしょく。では、なぜ一体ルカは、今一人の人物の名を記さなかったのか、と言うと、ルカは意図的にその名を空欄にして、読者がその空欄に自分の名を入れて読むことを願ったのではないかと、そう想像されるのです。と言うのは、復活の主イエス・キリストは、今も、私たちの同伴者として、人生の道行きに於いて、何時も一緒に歩き、さまざまな出来事を通し、折に適って、聖書を紐解き、真理を、つまり、御自身のことを、説き明かして下さるからなのでしょく。

復活の主イエスが、エマオ途上でクレオパと今一人の弟子に遭われた時、彼ら二人は暗い顔をしていたと、17節に述べられています。この時の天候とは、まるで対照的な彼らだったのでしょく。主イエスが復活をされた最初のイースターの朝は、東から太陽が昇り、全地を明るく照らしていたのでしょく。彼ら二人がエルサレムからエマオに向かったのは何時頃であったのか、彼らは、夕刻前にはエマオに着いているのでしょくから、逆算すると、その日の午後過ぎ、と言うことになるのではないでしょくか。だとすれば、晴天であったなら、太陽が一番強く照りつける時刻です。ところが、彼らは、その明るい太陽の下で、暗い顔をして、下を向いて歩いていたのでしょく。だから、主イエスが近づいて来られたことにも、二人の仲間に加わり、彼らの話の中に入って来られたことにも、彼らは全く気付かなかったのでしょく。何が、彼らを暗くしていたのでしょくか。それは、「あの方こそイスラエルを解放して下さると望みをかけていた」(21節) ナザレのイエスが、十字架につけられ、死んでしまったばかりか、それから三日も経ったこの日、墓に納められていた、その遺体までが無くなっていたからでしょく。しかも、墓を訪ねた婦人たちが幾ら、「イエスは生きておられる」(23節)と告げた天使の言葉を伝えても、それが一体何を意味するのか、彼らには全く理解できなかつたからでしょく。彼らには、十字架は敗北のしるし、絶望以外の何物でもないと思われたのでしょく。確かに、そうなのでしょく。十字架は、それに続く復活と切り離して考えれば、そうとしか思われません。でも、復活の光を受けて考えれば、全く違つたものに見えて来るのでしょく。十字架は、敗北のしるしではなく、実は、勝利のしるし、十字架は、絶望をもたらすものではなく、何と、希望をもたらすものとなるのでしょく。何故なら、主イエス・キリストは、十字架に於いて全人類の罪を担い、御自身の死をもって、これを滅ぼし、復活して、罪と死と陰府の帝王であるサタンに勝利し、天に凱旋し、今や父なる神の右に座し、王の王、主の主(キング・オブ・キングス ロード・オブ・ローズ)となつて、この世界の見えざる統治者となられたからでしょく。これ程の明るさは他にありません。でも、窓をカーテで覆うか、そんなことをしなくても、目を閉じれば、真昼間でも、世界が闇に閉ざされるように、この事実が目が開かれるまでは、その闇は決して去ることはないのでしょく。では、どうすれば、この闇を一掃し、光に包まれることができるのか、と言うと、主イエスによって聖書が説き明かされ、ナザレのイエスとは、一体どなたなのか、特にも、その十字架と復活の意味が分かる時、初めて本当に、心の闇は晴れ、全身は光に包まれ、暗い顔は、気付かぬ間に、何時しか、消えてしまつているのでしょく。クレオパと今一人の弟子の身に起つたことを見れば、それは明らかでしょく。

ところで、復活のイエスがこの時なされたことにつき、ルカは、26節、27節でこう述べています。「メシア（つまりキリスト）はこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と言われ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」と。ここで言う聖書とは、当時はまだ新約聖書と言うものは存在していなかったのですから、私たちが現在旧約聖書と呼んでいるもののことを言います。それは、モーセ五書から始まっています。創世記から申命記までをモーセ五書と呼ぶのですが、それはモーセが書いたと信じられていたからです。次に、預言書が続きます。普通、それは預言者と呼ばれます。そして、諸書と呼ばれる詩編や箴言等、所謂宗教文学書がこれに加わって、これをもって、この時代、聖書全体と言ったのです。因みに、新約聖書が生まれたことで、それまでの聖書は、旧約聖書と呼ばれるようになったので、それまでは、モーセ五書のことを律法と呼び換えて、律法・預言者・諸書と呼び、ヒブル語では、トーラー・ネビーム・ケトゥビームと呼んだのです。それではあまりにも長過ぎて、呼び名としては使い勝手が悪いので、それぞれの頭文字を繋げて、“タナーハ”と呼ぶようになったのです。確かに、タナーハ、つまり、旧約聖書は、主イエスが誕生される以前に出来た文書です。でも、それは主イエス・キリストについて、預言の形で語った文書なのです。ヨハネによる福音書5章39節に、主イエスが、ユダヤ人たちに対して語られたこんな言葉が出て来ます。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考へて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ」と言うのです。ここに出て来る聖書も、わざわざ言う必要のないことですが、私たちが言うところの旧約聖書です。新約聖書は言うに及ばず、旧約聖書もまた、主イエス・キリストを証しする文書なのです。

宗教改革者のマルティン・ルターは、聖書について、こう言いました。「聖書とは、そこに主イエス・キリストが横たわっておられる飼葉桶である」と。聖書の中に、生ける主イエス・キリストを見いだす者にとっては、聖書は、この上もなく尊いものなのですが、その発見に至らない者には、極詰まらない、飼葉桶に過ぎないのです。聖書は、装丁を立派にし、豪華本にすれば価値が上がるのかと言うと、どんなに装丁を立派にしようと、それが証している主イエス・キリストが何者なのか、そのことに目が開かれない限り、何の価値もなく、それを所有している者にとっても、正に「豚に真珠」、「猫に小判」、と言う状態は、何時までも続くのです。主イエス・キリストがお生まれになった時、東から来た三人の博士たちは、ベツレヘムの貧しげな家畜小屋の飼葉桶の中に伏す幼子イエスを見て、がっかりするどころか、大いに喜び、精一杯の贈り物、黄金、乳香、没薬を捧げました。恐らく、この時の彼らは、どれだけ捧げても、まだ足りないと思ったことでしょう。それ程に、彼らにとって、主イエス・キリストとの出会いは、尊く、何ものにも代え難いものだったのです。では一体、どうすれば生ける主イエス・キリストとの出会いは叶うのでしょうか。

私たちは、日本キリスト教会信仰告白の中で、こう告白しています。「旧・新約聖書は神の言（ことば）であり、そのなかで語っておられる聖霊は、主イエス・キリストを顕かに示し、信仰と生活との誤りのない審判者です」と。ここでは、旧・新約聖書は神の言葉だと、そう告白しています。でも、そこに書かれている文字そのものが神の言葉だと言っているのではないのです。神の言葉と言え、ヨハネによる福音書の冒頭で、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。・・・言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた」と述べられていて、主イエス・キ

リストこそが神の言葉そのものであり、聖書は、その本来の神の言葉である主イエス・キリストを証しする文書であるからこそ、神の言葉と言われるのです。また、聖書を通して、主イエス・キリストを証する限りに於いて、説教もまた、神の言葉と言われるのです。カール・バルトと言う神学者は、この関連を明確に、こう説明しました。主イエス・キリストは“人となられた神の言葉”、聖書は“書かれた神の言葉”、説教は“語られた神の言葉”だと。しかし、その場合、大切なのは、「そのなかで語っておられる聖霊」が、いずれの場合も、働いてくださる限りにおいて、と言う厳しい条件が付くことです。聖霊とは、神の霊、キリストの霊ですから、つまりは、キリスト御自身が説き明かしてくださらなければ、どんなに聖書を読んでも、その核心を掴むことはできませんし、どんな雄弁をもってしても、生ける主イエス・キリストが共に働いて、それを聞く人の心に届けてくださらない限り、その説教は、どこまで行っても人間の言葉に過ぎず、そこでは何も起こらないのです。

私たちは、今日聖書朗読の折り、旧約聖書からは詩編 119 編の 129 節から 136 節までが読まれました。あそこの 130 節に、「御言葉が開かれると光が射し出で/無知な者にも理解を与えます」と、そう歌われていました。御言葉が開き、そこから光が射さない限り、御言葉は御言葉にならず、他の人間の言葉と何も変わらない、ちょっと気の利いた言葉にはなっても、それ以上のものにはならないのです。

生けるキリストとの出会いは、恵みとして与えられるものです。聖霊もまた、思いのままに吹くもので（ヨハネによる福音書 3：8）、人間が自由に操れるものではありません。では、人間には何ができるのでしょうか。何時起こるか分からない僥倖を待つ以外に、他に術はないのでしょうか。でも、失望は不要です。何故なら、人間にできることはあるからです。一つ目は、祈りつつ期待して待つことです。二つ目は、訪れた好機は決して取り逃がさないことです。三つ目は、受けた恵みは大切にしておいて無駄にしないことです。これだけのことを心得るだけで、事情は随分変わって来るのではないのでしょうか。「求めよ、さらば与えられん」（マタイ 7：7 文語訳）です。きっと、あなたの身には、「目から鱗」（使徒言行録 9：18）と言うことが、起こるに違いありません。

（三輪恭嗣）